

平成二十五年六月二十二日

吾は富士登山の経験こそなければ、その姿現はる、や、飽かず眺むるを習ひとす。新幹線にて關西に向ふに、新横濱を過ぐる邊りより富士の高嶺をまま望見す。線路の向きの變化により見え隠れするにつけて、「山の^ま際にい隠るまで 道の^{くま}限い積るまでに つばらにも 見つ、行かむを」と富士ならぬ奈良山を懐かしむ、彼の額田王近江國に下りし時作る歌を思ひ出しつ。遂には富士川にてその山容を閒近に見、渡り了ふるや忽ちに隠る、まで約一時間、「凱風快晴」の車窓こそ嬉しけれ。

小學校の夏休み、山中湖より見たる早朝の赤富士未だに忘れずして、六十數年後の一日、日の入り直前、靜岡驛にて赤く染れる富士の嶺を見る。東京行の「ひかり」數分後富士川を渡るも、既に日没し畢り、墨繪に早替りせる富士の姿に二度目の赤富士の記憶を刻みたり。

太宰治の「富嶽百景」に富士吉田の夜、明るき月光に輝く青き富士を見たりとあり、機會もがなと思ふのみ。孰れにせよ富士は季節により、見る方角により、はた時刻により様々にその景色を變じ、これ亦諸行無常を觀ずる日本人の心情に訴ふる大なるらむ。

更に富士山、古來數々の傳説と共に、歌に詠まれ、繪に描かれ、火山として研究せられ來たれる、その背後には富士に馳する悠久の歴史への思ひあり。山部赤人は「天地の分かれし時ゆ神さびて」と詠ひ出し、富士を讚へ、最後に「語り^つ繼ぎ 謂ひ^つ嗣ぎ行かむ 富士の高嶺は」と結ぶ。ここには天地開闢の過去に溯るのみならず、永遠の未來に向けて語り^つ繼ぎ 謂ひ^つ嗣ぎ行かむと願ふの心あり。また謠曲「羽衣」にて、天女が羽衣を纏ひ舞ひつ、三保の松原を去り行く情景を「御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶を降らし國土にこれを施し給ふ」と謠ひ納めて國の榮えになずらふ。これを要するに日本人に取りて、富士は登るより寧ろ仰ぎ見る山なること千古の歴史あり。富士見市を始め、富士見町、富士見坂など「富士見」の地名の多き、亦これを證す。當に日本文化の重要な構成部分と言ふべし。

本日、富士山世界文化遺産に登録決定す。「自然遺産」にあらずして、「文化遺産」なればとて、當初除外となりたる三保の松原を含めての登録に至りたる、誠に同慶の至りなると同時に、諸外國の知識人日本文化の本質を理解し始めたるを知る。嘗て日本文化を目して「低級、野蠻」とする句に「フジヤマ云々」あり。これに囚はれたるにや、日本に生を享くるを愧づるの若者その數を知らずと言ふ。

見渡せば、ノーベル賞を始め各界に於ける日本人の活躍漸く世界に認められつ、あり、徒らに卑下せず、慢心せず、更には三百年前の寶永の噴火にも注意を拂ひ、富士山と共に生くるの幸せを世界の人に共有せしむべく、自國文化の正しき理解と發信こそ望ましかれ。